慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヤスパースの教育哲学研究 : 実存的交わりと自己実現に関する理論的考察
Sub Title	
Author	増淵, 幸男(Masubuchi, Yukio)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1990
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.30 (1990.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000030-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

(3) 第四章孔子の「好学」においては「発憤」という語の意味解明を手がかりに，前章における顔回の「楽」と「賢」の合致の論証とともに，ここでは，孔子の教育者的眼に映じた子夏，子路，子貢等門弟たちの「好学」をとりあげ，孔子の教育的観点が，「教える」ことよりも，彼らの好学心を刺激し，それをはげまし，自発的に成長することを目指していたことが明らかにされている。

(4) 孔子が自分の立場を「一以貫之」と述べていることを孔子の「好学」の中核的部分の表現と見て，この場合の「一」を「多」との関係において論理的に究明して，展開していることも興味深いところである。

(5) 最後にあたって注目さるべきは，研究作業をすすめる過程で，あるいは，すすめた結果にもとづいて，孔子その人がもつ美しい言語感覚，透徹した論理性，そしてユーモアはじめ，人間にしてはじめて発現される喜怒哀楽の豊かな感性，といったものと重ね合わせながら考察を施している点である。このことによって，本論文は，まさに教育思想・教育哲学の論考であり，稔り豊かな研究成果を収めたものと評価できるのである。

5. 綜合判定

本論文の中には，多少の歴史的事実の誤認とドイツ語・フランス語の引用にケアレス・ミスが認められる。また参照して欲しい文献の若干の不足も感じられる。しかし，これらはいずれも瑕瑾といってよいものであり，全体として，方法論的にも，内容的にも博士論文として合格の水準に達しているものと判定する。

なお，面接試問において，正面きった質問にはもちろん，それ以外の多様の角度からするさまざまな質問に対しても，正確かつ適切に明快な回答をして理解の深さを示したことを付記する。

教育学博士

乙 第1995号　増淵幸男

ヤスパースの教育哲学研究
—実存的交わりと自己実現に関する理論的考察—

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学文学部教授，社会学研究科委員
西村　晧

副査　慶應義塾大学文学部教授，文学研究科委員
文学博士　大谷愛人

副査　日本女子大学文学部教授，教育学博士
長井和雄

副査　慶應義塾大学文学部教授，社会学研究科委員
井上　坦

〔学力確認担当者〕

慶應義塾大学文学部教授，社会学研究科委員
教育学博士　並木　博

慶應義塾大学文学部教授，社会学研究科委員
社会学博士　大淵英雄

〔内容の要旨〕

ヤスパースの哲学から実存的教育の内容を考察する際の基本的問題として，まず可能的実存の概念が明らかにされなければならない。この可能的実存が実存へと生成されることを「自己実現」と呼ぶことができる。つまり，現にある存在において，人間は常に本来在り得る存在を実現する存在である。従って，本来的な自己存在はまた実存を意味するが，そうした自己実現の過程は実存的教育の過程でもある。ヤスパースは「人間であることは人間になることである」という命題を唱え，真実の自己となることが人間の本質規定であるが，これを可能にする道こそ自己実現のための実存的教育と考えられる。

実存的教育は，人間が現実に置かれている状況の理解から出発して，本来在るべき実存としての自己を実現するように駆り立てる教育である。しかし現実世界は人間の自己表現を妨げ，人間存在の本来性を喪失させる状況が支配的である。そこでヤスパースは，人間が主体性を欠如して大衆一般に陥らないための内面的行為の不可欠性，真実の自己を選びとる「決断」の意義を明らかにしている。決断を自己実現のための基盤と捕えるならば，実存的教育は自己にこの決断を遂行するように駆り立てる教育，覚醒作用としての教育を意味する。しかも実存としての自己実現を教育の目的として，覚醒作用としての教育的営為が可能であるためには，人間を自由存在として承認することが必要である。この点にヤスパースの人間に対する限りなく開かれた哲学的思惟の内実と端緒が理解でき，自己実現を促す実存的教育の根拠を見て取ることができる。

実存的教育はかけがえのない個々の人間に，現にある自己から本来あるべき自己へと彼の存在意識の転換を促す教育を意味する。ヤスパースはこの存在意識の転換を，完結された体系的哲学によってではなしに，自らで思惟しつつ決意する可能的実存の「哲学すること，哲学する行為」に求める。ここに現に在る自己を「哲学すること」において実存への自己自身を越え出ていく超越，

もしくは飛躍の意義が解明される。それを理論的に追求しているのが，古典的な存在論とは相違するヤスパースに独自の「包越者存在論 (Periechontologie) である。そこでは人間存在の規定を，現存在・意識一般・精神・実存という各段階から分明にしながら，本来的な自己存在の実現に向けて順次各々の段階を超越していく思想が展開される。

ヤスパースは，包越者の諸様態を結合するものとして理性の役割を重視し，可能的実存としての人間が理性を取り戻すための道を開明する。それは可能的実存の自己超越を可能にする理性の新たな役割の発見を意味し，実存理性の哲学が打ち立てられる。ここから自己実現へと駆り立てる理性，すなわち実存理性に支えられた実存的教育の哲学的解明が可能になるのである。

ところで，ヤスパースは初期の研究段階で，精神病理学者として科学的認識と方法の重要性を踏まえながら，絶えず全体としての人間を研究課題にしていた。人間を主体性と個性において捕えることの不可避性を見通し，患者の実存に対する医者の実存という人格相互の交わりを重視していた。当時彼は社会学者M・ウェーバーの影響下に科学的な客観的認識の研究態度を養い，E・フッサールの現象学的方法とW・ディルタイの記述的・分析的手法を取り入れながら，自然科学と対比して精神科学を心理学研究に取り込み，更に1910-30年代の哲学雑誌「ロゴス」に展開された新カント学派のH・リッケルトとの論争に見られる世界観の解釈の相違を契機に，西南ドイツ学派の価値哲学と対決している。そうした初期思想形成の段階で，限界状況の概念やキルケゴールの単独者の思想に基づきながら，既に可能的実存として人間を把握する実存哲学の下地が築かれており，この初期思想の解明がヤスパースの実存的教育の理解の基礎となるのである。

ヤスパースの哲学的思惟の特徴として公明性・公開性・無制約性等々の性格を指摘することができる。それらの性格から彼の哲学を開かれた哲学と呼ぶならば，この性格こそまさに「包越者」の思想から生まれたものであり，この思想から教育的意味を読み取ることが決定的に重要である。そこでは包越者の諸様態を乗り越えて行く自己存在の哲学的思惟の歩みを明らかにし，「内在から超越へ」という主観—客観—分裂を超克する道を解明することによって，実存と超越者との開明が可能になる。このことは可能的実存の自己実現の過程として受け止めることができ，また理性なしにはそれが不可能であることを指示してもいる。とりわけ各々の包越者において展開される交わりの形式と内容との解明を通して，自己実現のための教育過程が実存的交わりの形態を巡って浮き彫りになる。実存的教育において不可欠の実存的交わりの内実を解明するための前段階を成すものである。

さて，ヤスパースの教育哲学を考察する場合に，交わりの解明がその中心になる。彼の哲学は交わりの哲学と呼んでもよい程，実存的交わりの論述に固有の教育的内容が盛り込まれている。実存的交わりにおいて「自己が他者とともに」自己実現を遂行すること，すなわち教育における実存的な人間関係を明らかにしたのは，ヤスパースの交わり論 (Kommunikationslehre) 以外にはない。その意味で，本来的な自己実現へと駆り立てる教育における人間関係を洞察する際に，ヤスパースの実存的交わりの解明は不可欠である。彼は哲学することと交わりの遂行とが同じことであると考えるが，それは交わりにおいてのみ単独者間の共同する哲学行為が可能になるからである。ヤスパースにとっての哲学行為は可能的実存による自己実現のための行為であったが，交わりの在り方如何によって教育の内実が決定すると言える。そこでヤスパースは交わりの形態と段階とを，前述の包越者の諸様態の論究と同様に，現存在の交わりから順次，意識一般，精神，実存の交わりへとその都度の段階を乗り越えて行く。ここに「愛しながらの闘争」と言われる自己実現を可能にする特有の闘争が展開される。それは愛の弁証法と言えるし，プラトンの対話法，キルケゴールの孤独の超克，といった諸思想をわがものとしながら，自らの存在意識を変革させる実存的交わりに特有の闘争なのである。

交わる人間相互の実存生成をめざす実存的交わりは，一切の権威や主従関係を超克することによって成立する。ヤスパースは可能的実存相互の「水準の同等性」を重視するが，これこそ実存的教育における人間関係の基本原理となるものである。そのような教育関係とは，自覚的形成を促すソクラテス的教育の形態を意味する。ヤスパースは教育の基本形態として，スコラ的教育、マイスター的教育，ソクラテス的教育を類別しているが，これらの教育を覚醒・決断・交わり・闘争といった自己実現に不可欠の諸契機において意義づけるならば，ソクラテス的教育の内容が教育哲学的に貴重な示唆を与えていると言わなければならない。

以上の考察は現代教育に直結する問題として人間性の育成の問題へと展開できる。人間性の探求は近代科学・技術の人間支配の中で，単に現代におけるヒューマニズムの考察に止どまらず，来るべきヒューマニズムを問い

ながら，教育は人間の非人間化，人類の破滅という危機的状態の克服に目を向けなければならない。ヤスパースは人間存在の自由と真理の根拠を問い質し，世界政治への鋭い感覚の育成に期待をかけるが，このことは現代のヒューマニズムと結合した教育の課題として，倫理性を意識した人間教育の遂行，人類の平和実現のための教育哲学の構築，とりわけ実存的交わりと実存理性に基づいた共同体の建設を意味しているのである。それはまた，現代に絶対的権力をもつ科学的真理に対する反省的熟考なしには哲学的確信とはならない。ヤスパースは実存的真理を巡って哲学することの意味の確立を試みる。そこに科学的知の同化の仕方から，理性的判断を根拠にして実存へと至る人間的真理の探求を，教育の究極目標に掲げるのである。

最後に，歴史との交渉の仕方と意義を明らかにするヤスパースの歴史哲学研究は，哲学の世界史を完成させるという自らの最後の研究課題でもあったが，それは人類の未来をいかにして構成するかという問い，つまり永遠の哲学の構築という大きな構想に支えられている。ヤスパースは様々な真理を語る過去の哲学者たちの思惟を自分の哲学思惟の形成の方法原理として確立する。そこには教育哲学の観点から見て，「我がものとすること」という教育的方法論が重視される。この同化作用は，自らも実存的真理への道に駆り立てられる教育方法と言える。自己実現という実存的教育の究極的目標を考えるとき，ヤスパースの実存的な歴史哲学は，歴史の中で自己自身となる道を照明しており，そこに自己実現の展望を見出すことができるのである。

〔論文審査の要旨〕

この報告は以下の事項に従って行う。

一．本論文における筆者の問題意識

二．本論文の内容の要旨

三．本論文の特筆すべき点と今後の研究課題

四．審査結果報告

一．ヤスパースの哲学はつねに人間の現実を問題とし，この現実のなかで人間がいかに生き，思索し，他者と闘争しつつ交わるのかを解明している。これを教育学的側面から見れば，現にある自己が真実にあるべき自己を実現していく自己教育の哲学考察ということができよう。それはヤスパースの実存哲学から読み取られる自己実現を可能にする教育の哲学である。ヤスパースの哲学から教育学的思想を導き出す試みは，彼の広範な著作に包含されている人間の本質理解を基礎に据えなければならない。そのためには彼の哲学そのものの理解が前提になる。初期の科学的方法論に関する著作，中期の実存哲学や歴史哲学，更に包越者と哲学的信仰に関する著作を経て，後期の政治哲学に関する著作，これら諸著作の根底に一貫して存在しているヤスパースの哲学の核心を捉えなければならない。筆者はこの核心を本論文において可能的実存としての人間理解と、人間存在を根拠づけている超越者の開明へと駆り立てる超越の論理とに見出している。そしてそのことを可能にする根本概念がヤスパースの実存理性であると受けとめている。

このような基本的理解に基づいて，筆者は，ヤスパースの哲学から実存的教育の本質解明を目指している。ヤスパースの実存哲学の核心は，本来的な自己存在としての実存の開明にあるが，その場合にヤスパースは人間の本質的な存在様態を，人間生成の在り方に求めている。この生成の概念は，教育作用の本質としての真実の人間形成の問題として展開することができるが，とりわけ個々の自己存在の実存生成に焦点を当てる実存哲学に基づく実存的教育においては，自己実現を可能にする自己陶冶の問題へと発展させなくてはならない。そこで本論文は，ヤスパースの哲学から導き出される自己陶冶の原理が，実存としての「自己実現」に存することを中心に展開しているのである。

二．まず序論において，ヤスパースの哲学から実存的教育の内容を考察する場合の人間存在の理解として，可能的実存の概念が明らかにされ，この可能的実存が実存へと生成されることを「自己実現」と規定する。この「自己実現」とは，実はトルケッターが『教育と自己存在」(1961) のなかで戦後いち早くヤスパース哲学に基づいた教育の目的として打ち出した概念であるが，いまでは教育界のみならず，社員教育を重視する経営学界でもしばしば聞かれる言葉になっている。人間の「自己実現」のための教育を，ヤスパースの「哲学すること」の思索の筋道に即しながら，筆者は「実存的教育」として教育哲学的に考察し，「実存的教育」を以て真実の自己を選びとる「決断」へと促す「覚醒」作用と規定する。この序論の考察が本論文全体の叙述の伏線となって，第一章以下第七章にいたるまで，ヤスパース哲学の包越者 (das Umgreifende) 論と交わり (die Kommunikation) 論を中心として延々とその論述が展開されているのである。

以下その内容を包括的に陳述する。

筆者は「教育の任務」について，「一般的な人間理解に焦点を当てることによって分明にされるのではなし

に，真実の自己を生き抜こうと決意する実存としての人間の形成が問題の核心に据えられる」といい，「実存へと駆り立てられる自己存在は可能的実存 (die mögliche Existenz) であり，可能的実存を実存獲得に向かわせる教育を，実存的教育」と呼んでいる。

このような「実存的教育」を実現するためには，まずもって実存哲学的な「人間理解」がなければならない。ヤスパースはキルケゴールを承けて，人間を「単独者」(der Einzelne) と規定するのであるが，筆者は「真実の自己存在を選びとるか否かの自己決定……単独者のこの自己自身の選びをヤスパースは決断 (Entscheidung) と呼ぶ」と指摘している。しかも単独者の「実存生成のための決断が恣意性に依存していてはならないことであり，さらにまた，決意する自己が超越者により贈られた存在であることを忘れて，自己存在の自由を絶対化したり，あるいは自己を他者との関係から切り離したりすることのない誠実さ」を必要とするのである。そしてこの場合の超越者は，キリスト教的有神論的実存哲学者ヤスパースにあっては，神といってもよいものである。

こうして，筆者は，単独者とそれを包み込む超越者との間にあって，われわれが自己自身の存在を意識するような存在様態として，現存在，意識一般，精神，実存をあげて，これらを包越者として構造化している。ここで提示される実存が「可能的実存」である。包越者とは，主観と客観との分裂，割れ目を超越するところのものである。そしてこの包越者のすべての様態の紐帯であり，その明晰性をもたらす能力，それがヤスパースのいう理性，さらに端的にいえば実存理性であった。

この包越者論から，筆者は極めて鮮かに，教育の在るべき姿を描き出し，現実の教育の在り方に根本的な示唆を与えている。すなわち，「生徒を実存生成へと駆り立てる教育，生徒の自己が彼自身の自己存在と一致するのを妨げない教育，そのような教育の可能性を問い質すことが不可欠」であるとして，実存を基本的に支えている基盤である現存在—意識一般—精神という，実存の内在的側面をその都度超越していく教育が要求される，という。この実存的教育における教師と生徒との教育関係をみるならば，教師は「積極的に生徒に対して自己の立場を表明」し，「教育的行為を通じて…… 教師自身が自己の実存から生き，そして教師と生徒が共に実存生成へと向かう」のであり，「生徒もまた自らの置かれている周囲の世界に対する責任を自覚し，かけがえのない自己存在に気づいて自ら主体的かつ自由な決断をするところに，はじめて生徒は教師と同一の地平に生きる者となりうるのである。」このことによって生徒は，自己生成のための希望に満ちた基盤を獲得するとともに，自己の責任を覚醒させられるのである。

以上要説した「包越者論と教育」は本論文の一つの大きな柱であるが，もう一つの大きな柱は「交わり論と教育の論理」である。

この「交わり論」は，もともと実存哲学における「人間存在」が「単独者」である限り，自己の本来性を守り，あくまでも自己に誠実であろうとすれば，キルケゴールの運命がそうであったように，またニーチェがショーペンハウエルについて述べているように，社会と正面から衝突し，社会的に孤立せざるを得ないであろう。そこにおいてヤスパースは「交わり論」をもって「実存」の孤立を防がんとするのである。ヤスパースは「交わり」の特徴を，単独者の間の「共同的哲学行為」(Symphilosophieren) であるとする。もともと，「現存在における実存の本質である自由は，選択における実存の可能性であり，同時に世界に依存していて偶然に導かれ，他者と共にある」とし，その上で，「私自身の選択は他者の選択である」とするのである。単独者としての自己存在には一定の限界が存するのであるが，この「限界状況において自己自身へと突破することによって，自己存在は実存の交わりへと飛躍 (Sprung) することができる」と筆者はいう。

次に，ヤスパースによれば，「闘争はすべての実存の根本形式である」が，「実存は，できるだけ現存在の闘争を理性的法則の下に置こうと試みなければならない」のである。しかも重要なことは，この闘争が愛の闘争だということである。「われわれは実存的交わりが理性の法則に導かれて，公明性と自己存在の真理のための愛する闘争を展開し，単独者相互が連帯し，愛しながら本来的自己生成に向かわなければならないのである。」

さて，このヤスパースの「交わり論」を教育理論化することには可成りの困難を伴う。筆者によれば，トルケッターの『教育と自己存在』にしても，スペックの『カール・ヤスパースにおける教育学的問題の独自性について』にしても，ともに不十分なままに留っている。僅かにボルノーの『実存哲学と教育学』(1959) が「危機」「覚醒」「訓戒」「相談」「出会い」「教育における挫折と冒険」という教育の実存的問題を扱って成功を収めたといってよいのであるが，そのボルノーも『新しい庇護性』(1955) では反実存哲学的立場を鮮明にしている。ヤスパースの実存哲学は，しかし，あくまでも本来的な自己存在の形成（実存的自己形成）の問題に切り込んで

いった。そして彼はヨーロッパの教育の源流ともいうべきソクラテスの「無知の知」への教育のなかに，彼の実存哲学的「自己実現」の教育の姿をみてとったのである。これを要するに，ソクラテス的教育の実存性を明るみに出したヤスパースの実存哲学的教育は，「教師と生徒とが，その精神からみて，共に責任を負い，対等の位置にいるときに成立する。両者の間に固定的教説は存在せず，無限に問いかけを行い，絶対的真理は知られないという無知が支配している。教育の作用は助産婦的であり，生徒の内面にある諸可能性が覚醒されるように援助の手が差し延べられる。この教育形態では，自己実現へと自らを駆り立てるときの自己が価値を有し，教師を権威として追従しようとする衝動は教師の側から拒絶され，生徒が自己自身に立ち帰るように突き放される。ここでは両者の間に愛する闘争が根底」となっている，というのである。

三．本論文の特筆すべき点と今後の研究課題

まず特筆すべき点を次の三点にまとめることができる。

第一に，このテーマは実存哲学や実存思想の研究者が，ヤスパースやボルノーなどの著作・論文類に接するようになって以来，ひと頃かなりの関心をもった問題であったが，その哲学研究者の側からは「教育学」への通路をつけることができず，ある意味では半ば放置されてきたにも等しい問題であったが，それを筆者は教育学研究の側から通路をつけようとしたことは，実存哲学や実存思想が次の領域もしくは段階の作業として当然なすべき作業を引き受けたことを意味するものであって，筆者がこれと取り組んだ勇気と努力は大いに賞賛すべきことである。

第二に，全体の構成からみて，序論で方法上ならびに内容上の大前提と大枠を設定し，生涯における思想の形成過程に即して個々の思想や問題点を考察していくという仕方をとったことは，少しの取り落しもないようにという筆者の誠実な心根がうかがわれ，そしてそれが実際に具現されているのをはっきりと知らされる。

第三に，筆者はヤスパースの思想と教育学の思想との接点，重なり合いを，主として「自己実現」と「交わり」に求め，両概念を，そしてとくに後者を，ヤスパースが哲学することの核心とみなしている点を捉え，それを，個人間のそれとしてのみならず，「人類という基盤での交わりの実現可能性の追求」として本論文の考察対象にしたことは，何よりも問題提起として大きな意味をもつ。

次に，敢えて筆者の今後の研究に際して留意してもらいたい点をあげれば，以下のような点である。

筆者はヤスパースの思想がもつ諸概念の概念的に正確な解釈と，それらの誤りなき概念的調整とに，ヤスパースのほとんど全著作に即して全力を傾注している。そのためにその叙述の全体はそれらの思想と諸概念の極めて客観的な概念的記述という体裁をもったものに終始せざるをえなかった。しかしながら「実存」という極めて主体的なる概念の登場は，教育ならびに教育学の世界に，単に一つの新しい概念・思想が加わったということを意味するものではなく，それは，従来の「教育」や「教育学」の枠そのものの破砕を意味するほどのラディカルなものを秘めている筈である。この問題を徹底的に追究していくとき，そこに何が結果するか。われわれ現代の教育学者の心胆を寒からしめる結果を生ずるかもしれない。しかし本論文はすでにこの問題に向って挑戦しているのである。筆者はいままで以上の勇気をもって今後の研究を遂行して欲しいと思う。

四．審査結果報告

本論文は，ヤスパースの膨大な諸著作をよく読み込んで，隅々まで理解が及んでいる。これまでにも，教育哲学の研究者でヤスパースに取り組んだ人も少くないが，ほとんどの人のヤスパース研究が長続きせず，不十分な理解のままにやがてヤスパースを離れていっている。本論文はそれらの先行の業績を超えるだけの理論的成果を収めているものと評価することができる。よって，博士論文として十分にその水準に達しており，教育哲学界と教育界に寄与する所も極めて大であるといえるものである。

社会学博士

乙　第2007号　　関　根　政　美

マルチカルチュラル・オーストラリア
—人種・エスニック集団関係の変遷の一考察—

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学法学部教授，法学研究科委員
社会学研究科委員，社会学博士
十　時　嚴　周

副査　慶應義塾大学法学部教授，法学研究科委員
社会学研究科委員，社会学博士
川　合　隆　男

副査　慶應義塾大学法学部教授，法学研究科委員
鶴　木　　真